

エウリーピデース『ヘーラクレス』におけるリュコス殺害

浜本 裕美

エウリーピデース『ヘーラクレス』の前半¹⁾の三スタシモンについては、それらが、讃歌、競技祝勝歌などの伝統を引き継ぐことが指摘されている²⁾。こうした研究成果を踏まえてFoleyは、劇前半のコロスをヘーラクレスの称賛者と位置づけ、彼が狂気に陥ってしまっただけからは、その狂気故に彼を称えるというコロスの役割が成り立たなくなると論じている³⁾。ヘーラクレスが狂気に襲われ、妻子を殺害することは、本劇において最も衝撃的な出来事と言えよう。狂気に襲われた後は、そのヘーラクレスの不幸を巡って、劇は進行する。だが狂気に襲われる以前に、ヘーラクレスが舞台上で為すことの大半は、彼の家族の命を脅かしていた王権簒奪者、リュコス⁴⁾の殺害に纏わることである。そのリュコス殺害において、コロスによるヘーラクレスの称賛は、頂点に達すると言える。

しかしながら、ヘーラクレスが抱いているリュコス殺害の目的は、コロスが、彼を称える際に思い描いたようなものではない。この隔たりは、いかに理解されるべきなのか。なぜコロスは、リュコス殺害に際して、あれほどまでに⁵⁾ヘーラクレスを称えようとするのか、この点をテキストに即して改めて問うてみたい。だがコロスの歌は多層であり、意味を限定してしまうことには留保が必要である⁶⁾。したがって本稿は、問題を登場人物、テーバイの長老としてのコロスに限定する。まず、テーバイの長老たちはなぜ祝勝を歌うのかと問い、その上で、彼らがヘーラクレスの勝利を祝して歌うことの持つ意味を考察したい。テーバイの長老というコロ

スの役柄から、彼らの歌う称賛を捉え直すことは、本劇におけるコロスの位置づけの理解、ひいては劇全体の理解に、何らか貢献を果たしえよう。

本稿の見取り図を提示したい。第1節では、本稿の問題設定をテキストから裏付けるために、ヘーラクレスが、家族のための報復を目的として、リュコスの殺害に続いてテーバイ内部の者に対しても攻撃を意図していることを取り上げる (I)。第2節、第3節において、テーバイの長老たちがヘーラクレスを称賛する動機を探る。第2節では、リュコスの死がテーバイの支配権移行を伴うことを取り上げ、コロスがリュコス殺害をテーバイ全土が祝すべき公的事柄と位置づける要因を示す (II)。第3節では、コロスがリュコスの死に何を期待したのかを明らかにしたい。そのために、コロスが、家族救済をも含めた、ポリスの秩序回復という希望をヘーラクレスに託していることを論じる (III)。最後に、ヘーラクレスとコロスとの接点が、コロスが彼を称賛するという行為に求められることについて考察したい (IV)。

I

本節では、リュコスの死をどのように捉えるかについて、コロスとヘーラクレスとが、隔たりを見せることを確認する。そのために、ヘーラクレスが、リュコス殺害に続いてテーバイ人に対する攻撃を意図していることを取り上げ、以下の二点を論じる。すなわち、そこに内乱という状況設定が関与することと、ヘーラクレスが家族のための報復を目的としていることの二点である。

コロスは、リュコス殺害をポリス全体が祝すべき事柄と見なしている。すなわちコロスは、「歌い踊ることが、祝宴が、テーバイの聖なる都中で関心事となる *χοροὶ χοροὶ / καὶ θαλῖαι μέλουσι Θή-/ βασιερὸν κατ' ἄστν⁷⁾*」(763-5) と歌い始め⁸⁾、さらに、ヘーラクレスの称賛を呼びかけ、イスメーノス、ポリスの大路、ディルケー、アーソーポスの娘達、と名を連ねてゆく。

Ἴσμην' ὦ στεφαναφόρει
 ξεσταί θ' ἑπταύλου πόλεως
 ἀναχορεύσασ' ἀγυιαὶ
 Δίρκα θ' ἄ καλλιρρέεθρος,
 σὺν τ' Ἀσωπιάδες κόραι
 πατρὸς ὕδωρ βᾶτε λιποῦσαι <μοι> συναϊδοί,
 Νύμφαι, τὸν Ἡρακλέους
 καλλίνικον ἀγῶνα.

イスメーノスよ、花冠を戴け、七つの門持つポリスの磨かれた大路よ、
 輪に集って歌い踊れ。流れ麗しきディルケーよ、アーソーポスの娘と共
 に父の水を離れ出でて、<私>と共に歌え、ニンフよ、ヘーラクレス
 の勝利に輝く戦いを。(781-8)

コロスはテーバイ全土に向けて、ヘーラクレスを称えよ、と歌っている。しかし、このコロスによる呼びかけに、ポリスは応えようとするだろうか。ヘーラクレスは、テーバイの川イスメーノスが、またディルケーが、心から迎え入れうる復讐者なのだろうか⁹⁾。ヘーラクレスは、その復讐の決意をこう語っていた。

πρῶτον μὲν εἶμι καὶ κατασκάψω δόμους
 καινῶν τυράννων, κρᾶτα δ' ἀνόσιον τεμῶν
 ῥίψω κυνῶν ἔλκημα· Καδμείων δ' ὄρους
 κακοὺς ἐφηῦρον εὖ παθόντας ἐξ ἑμοῦ
 τῷ καλλινίκῳ τῷδ' ὄπλῳ χειρώσομαι,
 τοὺς δὲ πτερωτοῖς διαφορῶν τοξεύμασι
 νεκρῶν ἅπαντ' Ἴσμηνὸν ἐμπλήσω φόνου,
 Δίρκης τε νᾶμα λευκὸν αἶμαχθήσεται.
 τῷ γάρ μ' ἀμύνειν μᾶλλον ἢ δάμαρτι χρὴ
 καὶ παισὶ καὶ γέροντι; χαιρόντων πόνοι·
 μάτην γὰρ αὐτοὺς τῶνδε μᾶλλον ἦνυσα.

まずはじめに、新たな僭主たちの館を覆しに行こう、そして不敬な頭を

切り取って、犬どもの餌食として投げ捨ててやる。それからカドモスの裔の者らのうち、私に恩を仇で返したとわかった奴等は、この勝利に輝く武具で打ち負かすのだ。他の者は翼ある矢で八つ裂きにして、イスメーノスを屍の血糊で埋め尽くし、ディルケーの輝く流れを血に染めてやる。なぜかといって、妻と子供たちと老いた者よりも先に、誰を私が守るべきだというのか。難業よ、さらば。このことを為さずに難業を成し遂げても無益だからだ。(566-76)

リュコス殺害に続いてヘーラクレースが画策したのは、テーバイ人の殺戮であった。テーバイの市民が自分の家族を救おうとしなかったことを知り、ヘーラクレースは「では私が為したミニュアイ人との戦いに、彼らは唾を吐きかけたのか μάχας δὲ Μινυῶν ἄς ἔτλην ἀπέπτυσαν;」(560)と衝撃を隠せないでいる。ミニュアイ人への戦勝という恩¹⁰⁾を忘れたテーバイ人に対する、ヘーラクレースの激しい怒りが、彼の復讐の決意には込められている。

ヘーラクレースがテーバイ人に対する復讐を意図する一因は、テーバイが内乱状態にあるという状況設定に求められる。リュコスは、内乱に乗じてテーバイ王権を掌握した(543)。アムピトリュオーンは、リュコスの一味に触れてこう語っている。

πολλοὺς πένητας, ὀλβίους δὲ τῷ λόγῳ
δοκοῦντας εἶναι συμμάχους ἄναξ ἔχει,
οἱ στάσιν ἔθηκαν καὶ διώλεσαν πόλιν
ἐφ' ἀρπαγαῖσι τῶν πέλας, τὰ δ' ἐν δόμοις
δαπάναισι φροῦδα διαφυγόνθ' ὑπ' ἀργίας.

言葉の上では裕福だと思われている、多くの貧乏人たちを、王[リュコス]は味方に持っている。その者たちは、周りの者たちから略奪するために、内乱を引き起こしポリスを滅ぼし去ったのだ、彼らの家産の方は、放蕩で失われ、怠惰によって消え失せた。(588-92)

リュコスは、テーバイ内部に多くの味方を有している。したがってリュ

コス殺害は、テーバイの内部に刃を向けることに通じるのである。ヘーラクレスが報復の対象としてあげた「他の者 τοὺς δὲ」(571)が、彼の家族に直接害を及ぼさなかった者をも含意しうるのかどうかは、明らかではない¹¹⁾。彼は、家族の危機を知って、甚大な衝撃を受け激昂している。彼の言葉に厳密な論理性を求めることには留保が必要と言えよう。いずれにせよ、ヘーラクレスが表明しているのが、川を朱けに染めるだけの人の血、テーバイ人の血を流す意志である、とは言えるだろう。コロスがリュコス殺害に対して顕わにする歓喜と、ヘーラクレスが企てた行為との疎隔は、見過ごすことのできない程に大きい。

さらにヘーラクレスが燃やす敵愾心は、家族への愛情、義務と表裏一体のものである。家族を救済できないならば難業など意味がないとして、彼は「難業よ、さらば」(575)と口にしてしている。リュコスに対してのみならず、テーバイ人に対しても報復の意図を表明するヘーラクレス (566-76, 引用上記) に対して、コロスとアムピトリュオーンは各々言う。

<Χο.> δίκαια τοὺς τεκόντας ὠφελεῖν τέκνα

πατέρα τε πρέσβυν τήν τε κοινωνὸν γάμων.

Αμ. πρὸς σοῦ μὲν, ὦ παῖ, τοῖς φίλοις <τ'> εἶναι φίλον

τά τ' ἐχθρὰ μισεῖν.

<コロス> 子をなした者が、子と年老いた父と婚姻を共にする妻を助けるのは、正義に適ったことです。

アムピトリュオーン 子よ、お前らしいことだ。親しき者には親しく接し、敵を憎むのは。(583-6)

「親しき者を愛し、敵を憎む」は、伝統的な倫理規範である¹²⁾。ヘーラクレスは、「親しき者 φίλος」として、それも家の長として家族を救済する責務を負っている¹³⁾。また、本劇のヘーラクレスが家族を大切にす人物として描かれていることは、既に諸家が指摘している¹⁴⁾。ヘーラクレスの家族が友人からの助けを欠いていたことを考慮すれば (cf. 551-61), アムピトリュオーンの言う親愛関係は、家族集団に限定されている、と言えるだろう。しかし、家族関係に限られた狭義の親愛関係は、ポリス

共同体の価値との衝突を引き起こしかねない¹⁵⁾。家族を救い、その報復を果たすこと、それは伝統的な倫理規範に適った行為ではあるが、コロスによる称賛に相応しからぬ側面をも備えている。

ヘーラクレスが抱く報復の意図と、コロスがポリス全土に向けて歌う彼に対する称賛との間には、溝があることが確認された。テキストに即して、問題をより具体的にしておこう。コロスは、「ヘーラクレスの勝利に輝く戦い τὸν Ἡρακλέους/ καλλίνικον ἀγῶνα」(787-8)を称えよ、と歌う。ヘーラクレスは「勝利に輝く武具で τῷ καλλινίκῳ τῷδ' ὄπλῳ」(570)、テーバイ人に報復を果たそうとした。ヘーラクレスはさらに、この家族救済を成し遂げなければ、「私はこれまでのように勝利に輝くヘーラクレスとは呼ばれないだろう οὐκ ἄρ' Ἡρακλῆς/ ὁ καλλίνικος ὡς πάροιθε λέξομαι」(581-2)と口にして¹⁶⁾。その言葉通りにヘーラクレスは、リュコス殺害を果たし、コロスによって称えられる。この称賛という行為それ自体の持つ意味は、第4節において取り上げる。しかし、両者がリュコス殺害に見たもの、すなわちその勝利の内実は、決定的に食い違う。その食い違いを、まずは明らかにする必要があるだろう。ヘーラクレスは、家族のために報復を遂げようとしている。だがコロスは、なぜリュコス殺害を称えるのか。この点は、第2節、第3節において論じられる。

II

コロスは、なぜポリス全体にヘーラクレスの称賛を呼びかけるのか。本節は、リュコスの死がテーバイ王権の移行という公的な意義を持つことを指摘する。

劇の幕開け時点でのテーバイ王は、エウボイア出身のリュコスである。そのリュコスの死は、ポリスの支配権が移行することを意味する。リュコスは、先のテーバイ王クレオンは勿論、その息子たち、すなわち次期王位継承者をも殺害した(539)。したがって、テーバイ王家を継承する資格を有するのは、血筋の点からまず第一に、クレオンの娘メガラーの息子である¹⁷⁾。メガラーとヘーラクレスの間には、三人の息子がいる。リュコスがメガラーともども子供らを殺害しようとするのは、この血縁関係の

故である。アムピトリュオーンは「我々にはクレオーンに結びつけられた縁戚関係が、最大の不幸となったようだ ἡμῖν δὲ κῆδος ἐς Κρέοντ' ἀνημμένον/κακὸν μέγιστον, ὡς ἔοικε, γίγνεται」(35-6) と嘆く。リュコスは、ヘーラクレスの家族を殺害することを正当化して言う。「私の振舞いは恥知らずなのではない、遠謀深慮なのだ。私はこの女の父親クレオーンを殺害して、玉座を手に行っていることをよく承知している。だから、この子らが育てられることで、私が為したことの復讐を遂げる報復者が生き残ることを望まない」(165-6)。このリュコスの言い分は、的外れではない。成人した暁には、母方の祖父クレオーンの敵を取り、王笏をテーバイ王家に取り戻すことこそが、王家の血を引く男子に求められる武勲となる¹⁸⁾。

この状況下においては、ヘーラクレスが帰還し、リュコス殺害を果たすならば、彼自身が幼い息子に代わって、実質的権力を握ることが想定されるのである。何よりも、王女メガラーの夫であり、ギリシア随一の英雄たるヘーラクレスが王権篡奪者への報復を果たせば、彼を王と呼ぶことに異議を唱える者はなかるう¹⁹⁾。リュコス殺害は、ヘーラクレスのテーバイ王権への接近を同時に意味する。こうした事情が、リュコス殺害の場面において、コロスがヘーラクレスを王と呼ぶことを説明するだろう。

χαρμοναὶ δακρύων ἔδοσαν ἐκβολάς·

πάλιν ἔμολεν,

ἃ πάρος οὐποτε διὰ φρενὸς ἤλπις' ἄν

παθεῖν, γὰρ ἄναξ.

喜びのあまり涙が流れ落ちる。再び戻ってきた、以前には決して身に受け得ようと心をよぎることさえなかった希望が、この地の王が。(743-6)

「王 ἄναξ」という語彙は、政治的権力者に限定されない幅広い用法を持つ²⁰⁾。しかしながら、本劇での用法はかなり限定されていると言ってよい。すなわちアポローンに冠せられた一例(ἄναξ Παιάν, 820)を除いて²¹⁾、「テーバイ王」を指すのに用いられる²²⁾。ヘーラクレスは、引用箇所 746 行において本劇中初めて異論なく「王 ἄναξ」と呼ばれ²³⁾、これ以後「王 ἄναξ」と名指されることはない。単に勝利した英雄への敬称として、この

語彙が選ばれたとは了解しにくい。殺されようとしているリュコスが、やはり「王 ἄναξ」(753)と呼ばれ、さらに、使者がリュコス殺害を「この地の王を殺して γῆς ἀνακτ' ἐπεὶ κτανῶν」(923)と報告する。ヘーラクレースに向けられた「この地の王 γῆς ἀναξ」との呼称は、「この地の γῆς」の属格と、本劇での ἄναξ という語彙の使われ方から、テーバイの支配権を政治的に掌握した者にこそ用いられるに相応しいと言えよう。コロスの言葉遣いは、リュコスの死によって、ヘーラクレースがポリスの支配権を掌握する可能性を見越したもの、と解することができる。

この理解によって、コロスがなぜポリス全土へ向けて彼の称賛を呼びかけるのか、この点がより明確になるだろう。すなわち、コロスは王権篡奪者に対する復讐の成就を称え、テーバイ王家が再び王笏を取り戻したことを祝している。コロスがリュコス殺害を祝うとき、それは、かつての戦友アムピトリュオンとその家族の不幸からの脱出、また彼ら自身を奴隷呼ばわりした僭主(250-1)の最期、といった事柄のみに向けられているのではない。コロスは、ヘーラクレースによる支配権掌握、テーバイ王家の復興という具体的な公的事柄をも視野に収めているのである。

III

本節は、コロスがなぜ称賛を呼びかけるのか、との問いをさらに進める。コロスはリュコス殺害をポリスの問題として捉えた。それは先に指摘したように、リュコスの死がテーバイ支配権の移行を意味するからである。だがそれだけでは、コロスの歓喜を説明するには不十分であろう。以下の点を明らかにする必要がある。すなわち、コロスはヘーラクレースの家族救済をいかに位置づけているのか。さらに、リュコスの死に伴ってテーバイ王権が移行することは、コロスに何を期待させたのか。

コロスは、往年の戦友アムピトリュオンのもとを訪れている。リュコスの横暴に怒りを見せつつ、コロスは「私が生きている限りは、お前は決してヘーラクレースの子供たちを殺すことはできまい」(261-2)と言い、身の危険を冒しても彼らを守る意思を表明する。それは、アムピトリュオンに対する親愛の情のみに発するのではない。コロスは言う。

ἐπεὶ οὐ μὲν γῆν τήνδε διολέεσας ἔχεις,

ὁ δ' ὠφελήσας ἀξίων οὐ τυγχάνει·

お前[リュコス]のほうはこの地をすっかり滅ぼして手中に収めているが、かの方[ヘーラクレス]は益をもたらしたのにそれ相応のものを受け取っていない。(264-5)

ヘーラクレスのもたらした益とは、かつて彼がテーバイのためにミニュアイ人と戦ったことである²⁴⁾。コロスは、ヘーラクレスの家族を救うことを恩返しと捉えている。換言すれば、家族の窮状にポリスの成員たる市民が手を差し伸べるべきだと主張しているのである。コロスにとってヘーラクレスの家族の災難は、友人の不幸であると同時に、ポリスの関心事とされるべき事態である。

ではコロスは、リュコス殺害に何を期待したのだろうか。その期待は、コロスの人物像に即して理解されねばならない。本劇のコロスは、ヘーラクレスの家族救済のために何ら有効な手だてを取り得ず(312-4)、しきりと自身が老いていて力無いことを嘆く²⁵⁾。そうしたことから、コロスは、力の欠如を具現するものであり、若さ、強さといったものを具現するヘーラクレスと対比されるものである、と説明される²⁶⁾。だが、コロスがなぜ執拗に老いを嘆くのかという問いは、やはり本劇のテーバイの状況に照らして答えられねばならない。コロスが自らの老いを執拗に嘆くのは、ヘーラクレスの家族を救済できないが故であり、それはコロスがヘーラクレスの家族を親身に気遣っていることをも示している²⁷⁾。何よりも、老人の身でありながら、力の無さがこれほど切実な嘆きとなるのは、テーバイが助けに駆けつける市民を欠くからに他ならない²⁸⁾。コロスは、ポリスの現状を憂いて言う。

οὐ γὰρ εὖ φρονεῖ πόλις

στάσει νοσοῦσα καὶ κακοῖς βουλευμάσιν·

οὐ γὰρ ποτ' ἂν σὲ δεσπότην ἐκτίσῃ.

ポリスが良き思慮を失っているのだ、内乱と悪しき策謀に病んでしまつて。そうでなければ、決してお前[リュコス]を主人とすることなど

なかったはずだ。(272-4)

コロスは、ポリスが内乱に病むことを嘆き、憂慮する健全な市民であり、そのコロスが自身の老いを嘆くことは、テーバイの疲弊した状況に密接な関わりを持つ。

こうしたコロスの人物像を確認した上でこそ、コロスがリュコス殺害に抱いた期待を推し量ることができよう。リュコスは、内乱に乗じて王権を篡奪したのみならず、内乱を起こしたテーバイ市民らを味方に有している。リュコスの存在は、テーバイが内乱に陥っていることに分ち難く結びついているのである。先に述べたようにコロスは、リュコス殺害がテーバイ王権の移行を意味することを視野に収めている。これらのことを考え合わせれば、コロスが、リュコス殺害に際してヘーラクレースのことを「この地の王 γὰρ ἄναξ」(746)と名指し、心をよぎることさえなかった希望(745-6)、「予想だにしなかった希望」(771)と呼ぶとき、そこには彼らのテーバイ再生への切なる願いが込められていると解しうるのではないか²⁹⁾。ヘーラクレースが支配権を手にし、クレオーンの孫へとそれを伝えることは、テーバイ始祖スパルトイの末裔が、正統にテーバイの地を継承していくことをも意味する(cf. 4-7, 794-7)。それは、健全なあるべきテーバイの再生を含意するだろう。コロスがリュコス殺害に対して顕わにする歓喜の深さは、コロスがポリスの現状に対して抱く憂いの深さに等しい。コロスが歌う称賛は、支配権の移行、テーバイ王家の復興、さらにはポリス秩序の回復、という諸効果の連鎖への期待と確信に満ちている。その期待をもって、コロスはテーバイ全土に向かって、ヘーラクレースを称えよ、と歌うのである。

IV

本稿は、リュコスの殺害について、コロスが顕わにする期待とヘーラクレースが抱く意図との間に食い違いがあることを論じてきた。一方でヘーラクレースにとって、リュコス殺害は家族のための報復の手始めに過ぎなかった。他方でコロスは、リュコスの死をポリス規模の問題として捉え、

そこにテーバイ再生の希望を託した。

それでは、その両者の接点は、どこに求められうるのだろうか。本稿は、両者の接点は、コロスがヘーラクレスの称賛を呼びかけるという行為にこそ求められると考える。コロスがヘーラクレスを称賛するという行為が持つ意味を検討する必要があるだろう。

再び、コロスが歌う称賛とヘーラクレスが表明した復讐の決意とに立ち戻ろう。ヘーラクレスは、リュコス殺害を家族の報復のために為す。ヘーラクレスは報復の決意に添えて、このように言っていた。

τί φήσομεν καλὸν

ῥοδρα μὲν ἐλθεῖν ἐς μάχην λέοντί τε
 Εὐρυθέως πομπαῖσι, τῶν δ' ἐμῶν τέκνων
 οὐκ ἐκπονήσω θάνατον; οὐκ ἄρ' Ἡρακλῆς
 ὁ καλλίνικος ὡς πάροιθε λέξομαι.

どうして立派なことだと言えるだろう、エウリュステウスに遣わされてヒュドラや獅子と戦っておきながら、我が子の死には骨を折らないとしたら。それでは私は、これまでのように勝利に輝くヘーラクレスとは呼ばれないだろう。(578-82)

ヘーラクレスは、「勝利に輝く καλλίνικος」と呼ばれることを、リュコス殺害を果たすことの意義として持ち出す。本劇を通じて、ヘーラクレスにはこの語 καλλίνικος がしばしば用いられる³⁰⁾。またこのエピセツトは、文学伝統においてのみならず、儀礼においてもヘーラクレスに冠せられるのに馴染み深いものである³¹⁾。確かに καλλίνικος という語自体は、エウリーピデースの作品において珍しいものではない³²⁾。だが、本劇中のスタシモンが競技祝勝歌の伝統を引くことと³³⁾、ヘーラクレスに冠せられるエピセツトとして既に親しみ深いものであること³⁴⁾の二点から、本劇のヘーラクレスが καλλίνικος として特徴づけられていると解すことができる。

さらに、この語を通じて為される勝利者という特徴付けが、ヘーラクレス自身の自己理解にも適ったものであることが、上に引いた 581-2 行

から確認されるのである。彼は、これまで数々の戦勝をあげ、難業を成し遂げて「勝利に輝くヘーラクレス Ἡρακλῆς ὁ καλλίνικος」と呼ばれてきた。ヘーラクレスは、リュコスらに対する報復を成し遂げずには、これまでのように称えられることはないだろう、と言う³⁵⁾。家族が不当な仕打ちを受けたことに対して報復を遂げないことは、「親しき者を愛し、敵を憎む」という倫理規範³⁶⁾に悖ると言える。彼の報復は、英雄であるとの彼の自己規定に適うものであり、称賛に値する英雄であることを人々に証そうとするものなのである。優れた者・英雄であるためには、人々によってその卓越性が認められ、称えられねばならない³⁷⁾。英雄として人々から称賛を受けられないヘーラクレスは、もはやヘーラクレスとは呼ばれない存在であるとさえ言えるだろう。

だが内乱に疲弊するテーバイは、英雄を称える共同体を構成しえない。ヘーラクレスを称える共同体の役目を担ってゆくのは、コロスである。換言すれば、このコロスの称賛こそが、本劇において、ヘーラクレスが「勝利に輝くヘーラクレス」であり続けることを可能にする。コロスが称賛を歌うことは、コロスにとってリュコスの死が、祝賀に値する意味を持ちえたことを示すに留まらない。それは、ヘーラクレスを称えるという行為をもって、ヘーラクレスが英雄であることを支える場を成立させているのである。

その上コロスは、テーバイ全体にとっての祝賀としてヘーラクレスを称えてゆく。この称賛は、先に論じたように、コロスの抱くポリスの秩序回復という願いに結びついていた。コロスは、リュコスの死が、ヘーラクレスの家族救済に留まらない益をポリスにもたらすものと捉え、ヘーラクレスを称える。それは、ポリスの枠内にヘーラクレスを位置づけることを意味するだろう。だが、ヘーラクレスは、テーバイに刃を向けることに躊躇いを見せない。それは彼が、家族のために報復を果たそうとしてポリスの利害を度外視したことを示している。以上のことから、コロスが歌う称賛は、ポリスの枠組みから逸れていこうとするヘーラクレスを、英雄としてテーバイ内に位置づけようとするものである、と言うことができる。

結 び

本稿は、なぜコロスが、リュコス殺害に際してポリス全土にヘーラクレスの称賛を呼びかけるのか、と問うてきた。リュコス殺害が持つヘーラクレスにとっての意味と、コロスにとっての意味とは食い違いを見せた。一方でヘーラクレスは、家族の報復のためにリュコスを殺害するが、その報復の意図はテーバイ人にまで及んでいた。他方でコロスは、リュコスの死をテーバイ全体に関わる公的事柄と捉えた。そこには、内乱という状況が深く関与し、コロスは、ポリスの秩序回復という希望をヘーラクレスに託そうとしていた。しかしながら、この両者の接点は、コロスが称賛を歌うという行為にこそ求められるものであった。すなわちコロスは、ヘーラクレスを称えることによって、彼をテーバイ内に位置づけようとしていたのである。この両者の接点をもって、コロスの願いから逸れていくヘーラクレスの人物像と、そのヘーラクレスをポリスに受け入れようとするコロスの人物像とが浮き彫りにされている、と言えよう。本稿は、コロスの歌う称賛について、登場人物としてのコロスに向かって、すなわちテーバイの長老たちに向かって、なぜ、と問い直すことで、コロスがリュコス殺害に際して、過剰なまでにヘーラクレスを称賛することが持つ内実の一端を示しえたと考える。

注

- 1) 本稿は、「前半」という語を量的な意味で用いている。本劇の一貫性について、また本劇が幾つの部分に分割されるのかは、学説史上最大の争点となっているが、ここで立ち入ることはしない。だが筆者は、劇の場面間に隔絶を見出しうるならば、その隔絶を劇の一部として捉えるべきであるという見解に与している (cf. Arrowsmith, W., *Euripides II*, Chicago & London, 1956, pp. 45-6). 劇の筋立て内において幾つかの出来事が唐突に生じるように思われることと、劇全体を一つの作品として評価しうるか否かということは、同じ問題ではあり得ないだろう。
- 2) 本劇のスタシモンと、讃歌、競技祝勝歌といったジャンルとの関係についての文献は、Foley, H. P., *Ritual Irony: Poetry and Sacrifice in Euripides*, Ithaca and London, 1985, p. 178, n. 52 を参照せよ。殊に第二スタシモンについては、Parry, H., "The Second Stasimon of Euripides' Heracles (637-700)", *AJP* 86, 1965, pp. 363-74

において詳細な分析が為されている。

- 3) Foley 1985, pp. 175-92 (注2).
- 4) このリュコスという人物は、恐らくエウリーピデースの独創である (Bond, G. W., *Euripides Heracles*, Oxford, 1981, ad 31; Barlow, S. A., *Euripides Heracles*, Warminster, 1996, ad 31). その点からしても、リュコスに関係する事柄の理解は、本劇全体の理解にとって、意味を持ち得よう。
- 5) Cf. Sheppard, J. T., "The Formal Beauty of the Heracles Furens", *CQ* 10, 1916, p. 77, "excessive adulation"; Burnett, A. P., *Catastrophe Survived: Euripides' Plays of Mixed Reversal*, Oxford, 1971, p. 168, "a gigantic pageant of the pathetic fallacy"; Foley 1985, p. 185 (注2), "a pitch of hysterical optimism". Foleyはまた、コロスが歌う称賛は、競技祝勝歌の伝統を引くにもかかわらず、その過剰さ故に、人間を過度に称揚することで神々の妬みを招くということのないように配慮する競技祝勝歌の慎重な態度から逸脱している、と指摘する (1985, p. 186).
- 6) 悲劇のコロスの複雑さを分析する一つの試みとして、Calame, C., "Performative aspects of the choral voice in Greek tragedy: civic identity in performance" (tr. Robin Osborne) in Goldhill, S. and Osborne, R. (eds.) *Performance Culture and Athenian Democracy*, Cambridge, 1999, pp. 125-53 が挙げられる。
- 7) 本稿におけるテキストの引用は、Lee, K.H., *Euripides Heracles*, Leipzig, 1988 に拠っている。
- 8) このように祝賀のための歌舞に言及する悲劇テキストは他にもある。例えば、A. *Aga.* 23f.; Soph. *El.* 280; Eur. *Alc.* 1154f. アイスキュロス『アガメムノン』においては、ポリス中で、戦勝を祝う供犠が執り行われたと語られている (88-91, 594-7)。
- 9) Cf. Burnett は、コロスの歌う称賛が、ディルケーとイスメーノスという二つの川への言及を通じて、ヘーラクレスが表明した報復の意図を思い起こさせるものであることを指摘する (1971, p. 167 (注5)).
- 10) Cf. 47-50, 217-21, 560. ヘーラクレスの家族が嘆願する祭壇は、ミニュアイ人に対する戦勝を記念してヘーラクレスが設置したものである (47-50). その祭壇がテーバイの忘恩を視覚的に示す、との指摘が為されている (George, D. B., "Euripides' *Heracles* 140-235: Staging and the Stage Iconography of Heracles' Bow", *GRBS* 35, 1995, p. 153).
- 11) 無実の者への攻撃が含意されているとの見解は、Bond 1981, ad loc. (注4); George 1995, p.154 (注10) などに見られる。また Burnett は、ヘーラクレスが、ミニュアイ人に対する戦勝によってテーバイ全体に恩恵をもたらした以上、テーバイの全市民が彼に恩義を受けているため、彼は全市民に対して報復を意図していると論じる (1971, p.165, n. 13 (注5)). しかし、ヘーラクレスの家族の命を直接に脅かしたリュコスとその一味と、その他の市民とを同列には語りえないように思われる。
- 12) Cf. Blundell, M. W., *Helping Friends and Harming Enemies: A Study in Sophocles and Greek Ethics*, Cambridge, 1989, pp. 26-59. その他の文献に関しては、Blundell

- 1989, p. 26, n. 1 を参照されたい。
- 13) Barlow, S. A., “Sophocles’ Ajax and Euripides’ Heracles”, *Ramus* 10, 1981, p. 114. Cf. Benveniste, E., *Le vocabulaire des institutions indo-européennes: 1. économie, parenté, société*, Paris, 1969, pp. 335-53; Goldhill, S., *Reading Greek Tragedy*, Cambridge, 1986, pp. 79-106.
- 14) 例えば, Foley 1985, pp.188-90 (注 2) は, 文学伝統と比して, 本劇のヘーラクレース像の意外性を指摘する。
- 15) Cf. Goldhill 1986, pp. 79-106 (注 13); Blundell 1989, pp. 50ff. (注 12).
- 16) καλλινικος というエピセツトについては, 本稿第 4 節を参照されたい。この引用箇所 (581-2) においてヘーラクレースがこのエピセツトで呼ばれることを拒否している, と解す研究者もいる。E.g. George 1995, p. 154 (注 10)。だがその理解は ἄρα の解釈を困難にするだろう。
- 17) Cf. Vernant, J.-P., “Hestia-Hermes Sur l’expression religieuse de l’espace et du mouvement chez les Grecs” in *Myth et Pensée chez les Grecs*, Paris, 1985, pp. 155-201. 殊に「女性相続人・家付き娘 *epikleros*」を巡る議論 (pp.175-9) を参照されたい。
- 18) オレステースの復讐譚を想起せよ。Vernant 1985 (注 17) における子細な検討を参照されたい。
- 19) Cf. Ruck, C., “Duality and the Madness of Herakles”, *Arethusa* 9, 1976, p. 58 は, ヘーラクレースがテーバイ支配権に権利を持つのは, メガラーとの婚姻関係の故であることを指摘する。Lee, K., “Human and Divine in Euripides’ *Heracles*” in *Vindex Humanitatis Essays; presented to J. Bishop*, Arimidale, 1980, p. 40, “the rightful ruler”.
- 20) 例えば, 神々に冠せられる場合として, *Il.* 1. 390, A. *Aga.* 509, 513, *Eum.* 85; 英雄に冠せられる場合として, *Il.* 1. 442, al.; 王という称号として, *Od.* 20.194, A. *Pers.* 5, 787; 家長の意では, *Od.* 1. 397, 10. 216 などが挙げられる。
- 21) 1178 行は, Hermann の補いであり, 直接考察の対象とはしない。その提唱が仮に正しい場合には, テーセウスがアテーナイの王として呼ばれていることになる。いずれにせよ, 本稿の主張に反するものではない。
- 22) クレオーン 8; リュコス 321, 541, 589, 602, 707, 753, 768, 810, 923; ヘーラクレースの子供 467。
- 23) 「以前からの王 ὁ πρόςθ’ ἄναξ」(735) が, リュコスを指すのか, ヘーラクレースを指すのかについては諸説がある。ὁ πρόςθ’ ἄναξ (735) がヘーラクレースへの言及である, との見解は, Wilamowitz に端を発する。彼は, 写本の ἐκ αἰδαν ἐξ’ Αἰδα へ読み替えることを提唱する (Wilamowitz-Moellendorff, U. von, *Euripides Herakles*, 2nd ed., 1895, ad loc). 本稿の論議の文脈からは, ヘーラクレースを指すと解す場合にも, 「王 ἄναξ」との呼びかけがやはり, リュコスの殺害に関連した箇所で見られるという点のみを指摘しておく。
- 24) Cf. 本稿注 10.
- 25) 268f., 312-4, 436-41, 637-41, etc. 厭わしい老いという主題自体は, 稀有なものではない。E.g. Mimnermos, fr. 1; fr.2; fr.4 (West); *Hymn. Hom. Ven.* 218ff. また, 老

- い故の無力さが戦闘に参加できないこととして言及される例も随所に見いだされる。E.g. *Il.* 7.132-60; *A. Aga.* 72ff.; *E. Heracl.* 680ff. だが本劇のコロスはあまりに執拗に自らの老いを嘆くことから、諸家の注意を引いている（本稿注26参照）。
- 26) E.g. Sheppard 1916, p. 74 (注5); Chalk, H. H. O., “*APETH and BIA* in Euripides’ *Herakles*”, *JHS* 82, 1962, p. 9.; Padilla, M., “The Gorgonic Archer: Danger of Sight in Euripides’ *Heracles*”, *CW* 86, 1992, 3f.
- 27) 老いと若さの主題は、本劇を通じて展開されるものであり、コロスの抱く親愛によって論じ尽くされるものではない。ヘーラクレスの帰還後にも、コロスはこの主題を取り上げている。
- 28) 長老が、市民に加勢を要請しようとする例として、*A. Aga.* 1349; *Soph. OC* 841-3, 884-6がある。また、老人が若者に戦闘を任せる一例としては、*Il.* 7. 157-61が挙げられる。
- 29) Lee は、リュコス殺害後にコロスは、秩序の回復と ‘*Heracles the kallinikos*’ を称えている、としている (1980, p. 38 (注19))。しかし、たとえば Burnett は、ヘーラクレスによるリュコス殺害を “merely the successful termination of a peculiarly bloody vengeance killing” とする (1971, p. 168 (注5))。ここから明らかになるように、リュコスの死が、事柄それ自体としてテーバイの秩序回復を意味するとは言えない。つまりそのことは、コロスによるリュコスの死の受け止め方として説明されるべきなのである。
- 30) このエピセツトが本劇を通じて用いられることについては、Shelton, J., “Structural Unity and the Meaning of Euripides’ *Herakles*”, *Eranos* 77, 1979, pp. 109f., Barlow 1981, p. 114 (注13) などに言及がある。ヘーラクレス自身が口にする二例 (570, 582) 以外には、49, 181, 681, 788, 961, 1046に見られる。
- 31) Cf. Farnell, L. R., *Greek Hero Cults and Ideas of Immortality*, Oxford, 1920, pp. 147-9.
- 32) アイスキュロス、ソポクレスの現存作品には、用例が見られない。エウリーピデースの他の作品においては、以下の箇所に用いられている。*Med.* 45, 765; *Heracl.* 937; *Supp.* 113, 1059; *Tro.* 1221; *El.* 761, 865, 880; *IT* 12; *Phoe.* 855, 858, 1048, 1059, 1253, 1374, 1729; *Bacc.* 1147, 1161; fr. 65, 6 (Austin), fr. 43, 41, 81 (Snell, B. (ed.) *Euripides Alexandros*).
- 33) *καλλινικος* はとりわけ、競技大会の優勝者を祝う競技祝勝歌に相応しい語彙である。Cf. 本稿注2.
- 34) Cf. Farnellによれば、*καλλινικος* というエピセツトは、ヘーラクレスが戦闘と競技の庇護者であることを示すものである (1920, p. 148 (注31))。
- 35) Cf. 本稿注16.
- 36) Cf. 本稿注12.
- 37) Cf. Vernant, J.-P., “*PANTA KALA: From Homer to Simonides*”, (tr. Zeitlin, F. I.) in Zeitlin, F. I. (ed.), *Mortals and Immortals: Collected Essays*, Princeton, 1992, p. 85, p. 89.